久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第24号（2007）

九州方言における形容動詞の実態

崎　村　弘　文

On the Actual Aspect of *Keiyou-Doushi* 形容動詞 in Kyushu Dialects

Hirofumi SAKIMURA

【要旨】（4．まとめ参照。）

【キーワード】九州方言、形容動詞、形容詞形

0．はじめに

0−1　共通語において形容動詞の存立を認めるか否かの論[注1]はさておき、〈九州で形容詞がカ語尾になる地域では形容動詞もカ語尾になる〉現象－形容動詞の不存－は早くに知られた事実であった。しかし、実際調査してみるとナ語尾などを全く使わないというわけでもないようである[注2]。一方、九州の形容詞イ語尾地域でも〈丈夫（ジョーブー）だ〉〈横着（オーチャキー）だ〉の如く共通語の形容動詞相当語をイ語尾形容詞で表現する例の有ることは、松田正義1961等で指摘されていたにも関わらずあまり注目されることが無かったようである。

そこで、本稿では、いわゆる九州方言の三区画－豊日・肥筑・薩隅－からそれぞれ一地点の方言を選び、共通語形容動詞相当語をどのように表現するか、その実態を出来る限り詳細に明らかにし、以て九州方言における形容動詞の存否を含む諸特徴を明示せんとするものである。

0−2　なお、話者として次の方々に御協力頂いた。大分県大分市：田口貞子氏（1934年生。大分市三ケ田（みけた）町在住）・田北恵子氏（1941年生。同）・後藤キズ子氏（1922年生。大分市旦野原（のはる）在住）・後藤静子氏（1948年生。同）。長崎県島原市：林田美佐子氏（1929年生。島原市上の原（うえのはら）在住）・中村美代子氏（1936年生。同霊南（れいなん）在住）・奥村睦子氏（1940年生。同萩原（はぎわら）在住）。鹿児島県国分市（合併して現在霧島市）：若松伴男（ともお）氏（1944年生。国分市中央在住）。また、大分市での調査には話者の選定等に関し大分大学の日高貢一郎氏、別府大学の松田美香氏の多大な御協力を得た。国分市の調査では郷田厚洋氏の多大な御協力を得た。記して感謝申し上げる。

1．豊日方言における形容動詞相当語の実態
― 大分市方言を例に ―

1−1　形容動詞相当語の語形変化

（1）ヒマヤ　ワー（暇だ）

（2）アホヤ　ワー（阿呆だ）
（3）バカヤ　ワー（馬鹿だ）

（4）ヒマヤロー（暇だろう）
（5）アホヤロー（阿呆だろう）
（6）バカヤロー（馬鹿だろう）

（7）ヒマヤッタ（暇だった）
（8）アホヤッタ（阿呆だった）
（9）バカヤッタ（馬鹿だった）

（10）ヒマヤシ（暇だし）
（11）アホヤシ（阿呆だし）
（12）バカヤシ（馬鹿だし）

（13）ヒマヤッタリ（暇だったり）
（14）アホヤッタリ（阿呆だったり）
（15）バカヤッタリ（馬鹿だったり）

（16）ヒマヤケンド（暇だけど）
（17）アホヤケンド（阿呆だけど）
（18）バカヤケンド（馬鹿だけど）

（19）ヒマヤカラ（暇だから）
（20）アホヤカラ（阿呆だから）
（21）バカヤカラ（馬鹿だから）

（22）ヒマヤロカ（暇だろうか）
（23）アホヤロカ（阿呆だろうか）
（24）バカヤロカ（馬鹿だろうか）

（25）ヒマヤガ（暇だよ）
（26）アホヤガ（阿呆だよ）
（27）バカヤガ（馬鹿だよ）

以上、大分市方言で考えられる限りの形容動詞相当語の語形変化の例を示した。調査の際は、各表現形の現われる部分を含む短文（「明日ワ暇ダ」等）を方言に翻訳して頂き、各例を導き出した。三項目ずつくくりになっているが、これは、大分方言の形容動詞相当語語幹部分が二拍語では三種類の音調型を持っているため、それぞれに後接する語尾部分がどのように現れるか明らかにしようとしてそうしたものである。各例は、三ヶ田町で聞

かれるものであるが、旦野原では古形ジャが聞かれる。語形変化の在り方はヤの場合と概ね一様であるが、一部ジャシと云う形が無かったりジャケンド～ジャケドのゆれが見られたりと、小異が有る。

これらの語形変化の在り方は、名詞＋助動詞ヤ（ジャ）のそれと同様であり、例えば次の如くである。

（1′）アメヤ　ワー（飴だ）
（2′）ハナヤ　ワー（花だ）
（3′）フネヤ　ワー（舟だ）

（4′）アメヤロー（飴だろう）
（5′）ハナヤロー（花だろう）
（6′）フネヤロー（舟だろう）
⋮

このことは、大分方言における形容動詞相当語を、共通語の形容動詞そのものとは異なり、名詞＋助動詞の一部と見るのに根拠を与える事実と成る。

1－2　次に連体格の語形を130余例調査した結果を示す。

生憎ナ事、曖昧ナ事、暖ケー話、当タリマエナ事、阿呆ナ奴、憐レナ話、安心な暮らし、安全ナ町、イー加減ナ奴、意地悪ー奴、嫌ナ奴、嫌味ナ奴、色白ー人、陰険ナ奴、インチキー話、ウカツナ話、内気ナ人、エッチナ奴、円満ナ家、横着ー奴、（横道な奴、）横柄ナ奴、大ゲサナ話、大ザッパナ話、オダヤケー人、億劫ナ仕事、同ジナ事、親孝行ナ人、親不孝ナ奴、オンボロナ家、勝手ナ奴、活発ナ人、頑固ナ人、簡単ナ事、気障ナ奴、几帳面ナ人、気ノ毒ー話、奇抜ナ考え、気マグレナ奴、気マジメナ人、気短ケー人、キュークチー靴、器用ナ人、凶暴ナ奴、極端ナ話、気弱ー人、気楽ナ話、キレイナ服、勤勉ナ人、口達者ナ人、口下手ー人、軽薄ナ人、ケチー奴、下品ナ奴、元気イー人、堅実ナ人、強引ナ人、高級ナ車、強情ナ奴、公正ナ人、子ボンノーナ人、細ケー話、雑ー仕事、残酷ナ話、幸ナ人、四角ー箱、静カナ所、失礼ナ奴、自分勝手ナ奴、純粋ナ人、正直ー人、上手ナ人、上品ナ人、丈夫ー人、深刻ナ話、親切ナ人、慎重ナ人、心配ナ事、神妙ナ顔、辛辣ナ物言い、スケベーナ人、杜撰ナ話、スナオナ人、素朴ナ人、大胆ナ人、確カナ話、達者ナ人、単純ナ人、重宝ナ道具、テイネイナ仕事、手軽ー品、得意ナ事、鈍感ナ人、生意気ナ奴、ニギヤケー町、熱心ナ人、ノン気ナ人、ハイカラナ人、バカナ奴、卑怯ナ奴、皮肉ナ話、貧相ナ顔、無愛想ナ顔、不安ナ事、不器用ナ（ブキッチョイーとも）人、無作法ナ奴、不思議ナ話、不自由ナ暮らし、物騒ナ（ブッソネーとも）話、平気ナ顔、下手ナ仕事、変ナ人、真ッ赤ー色、真ッ暗ー部屋、真ッ黒ー顔、真ッ青ー顔、真ッ白ー雪、真ッ直ー道、真ットーナ人、間抜ケナ話、妙ナ

話、無邪気ナ人、無神経ナ人、無チャクチャナ人、迷惑ナ話、面倒ラシー（＝恥ずかしい）事、物好キナ人、軟ラケーふとん、優秀ナ人、有名ナ人、愉快ナ話、豊カナ暮らし、乱暴ナ奴、利口ナ人、ワガママナ人

回答の有った134語のうち下線を付した30語（22.4%）が、～ナではなくイ語尾形容詞形を取る（三ケ田町の例。旦野原では、色白ナ、インチキナ、オダヤカナ、キュークツナ、口下手ナ、雑ナ、正直ナ、物騒ナの8語は～ナ形のみを取る）。この中には、「細かい」「四角い」「真っ白い」等、共通語でもイ語尾形容詞形を取り得るものが無くもないが、全般に日常会話で良く聞かれる～ナ形形容動詞が大分方言ではかなりの程度イ語尾形容詞形を取る事実は認めて良いであろう。

共通語と同様～ナ形を取るものも多いが、～デ形・～ニ形の場合と同じく接尾辞・助詞等の付いた形と見なすことも可能である。

2．肥筑方言における形容動詞相当語の実態
―島原市方言を例に―

2－1　形容動詞相当語の語形変化

(28) ゲンキジャンバ（元気だもの）
(29) シズカジャンバ（静かだもの）

(30) ゲンキジャロ（元気だろう）
(31) シズカジャロ（静かだろう）

(32) ゲンキジャッタ（元気だった）
(33) シズカジャッタ（静かだった）

(34) ゲンキジャシ（元気だし）
(35) シズカジャシ（静かだし）

(36) ゲンキジャッタリ（元気だったり）
(37) シズカジャッタリ（静かだったり）

(38) ゲンキジャイケン（元気だから）
(39) シズカジャイケン（静かだから）

(40) ゲンキジャロカイ（元気だろうか）
(41) シズカジャロカイ（静かだろうか）

(42) ゲンキジャロダイ（元気だろうよ）
(43) シズカジャロダイ（静かだろうよ）

以上、島原市方言で考えられる限りの形容動詞相当語の語形変化の例を示した。調査の方法は大分市方言の場合と同様である。二項目ずつくくりになっているが、これは、島原市方言の形容動詞相当語語幹部分が拍数に関係無く二種類の音調型を持っている（即ち二型の語声調方言である）ため、それぞれに後接する語尾部分がどのように現われるか明らかにしようとしてそうしたものである。

これらの語形変化の在り方は、名詞＋助動詞ジャのそれと同様であり、例えば次の如くである。

（28′）アメジャンバ（飴だもの）
（29′）ハナジャンバ（花だもの）

（30′）アメジャロ（飴だろう）
（31′）ハナジャロ（花だろう）

このことは、大分市方言の場合と同様、島原市方言の形容動詞相当語を、共通語の形容動詞そのものとは異なり、名詞＋助動詞の一部と見るのに根拠を与える事実と成る。

2－2　次に連体格の語形を130余例調査した結果を示す（後続する体言は大分方言の場合と同様）。

生僧カ、曖昧ナ、暖カカ、当タリマエナ、阿呆カ、安心ナ、安全カ、イー加減ナ、意地悪カ、嫌ナ、嫌味カ、色白カ、陰険ナ、インチキナ、ウカツナ、内気ナ、エッチカ、円満ナ、横着カ、横道カ、横柄ナ、大ゲサカ、大ザッパカ、オダヤカカ（オダヤカナとも）、億劫ナ、同ジカ、親孝行ナ、親不孝ナ、オンボロカ、勝手カ、活発カ、頑固カ、簡単ナ、気障ナ、几帳面カ、気ノ毒カ、奇抜カ、気マグレカ（気マグレナとも）、気マジメカ、気短カカ、キュークツカ、器用カ、凶暴カ（凶暴ナとも）、極端カ（極端ナとも）、気弱カ、気楽カ、キレイカ、勤勉カ、口達者カ、口下手ナ、軽薄ナ、ケチカ、下品カ、元気カ、堅実ナ、強引カ、高級ナ、強情カ、公正ナ、子ボンノーナ、細カカ、雑カ、残酷カ、幸ナ、四角カ、静カナ、失礼カ、自分勝手ナ（自分勝手カとも）、純粋カ、正直カ、上手カ、上品カ、丈夫カ、深刻カ、親切カ、慎重ナ、心配ナ（心配カとも）、神妙ナ、辛辣カ、スケベカ、杜撰カ、スナオナ（スナオカとも）、素朴ナ、大胆カ、確カナ、達者カ、単純カ、重宝ナ（重宝カとも）、テイネイカ、手軽カ、得意カ、鈍感カ、生意気カ、ニギヤカカ、熱心カ、ノン気カ、ハイカラナ、バカナ、卑怯ナ、皮肉カ、貧相カ（貧相ナとも）、無愛想カ、不安カ、不器用カ、無作法カ、不思議カ、不自由カ、物騒カ、平気ナ（平気カとも）、下手ナ、変カ、真ッ赤カ、真ッ暗カ、真ッ黒カ、真ッ青カ、真ッ白カ、真ッ直カ、真ットーナ、間抜ケナ、妙ナ、無邪気カ、無神経カ、無チャクチャナ（無チャクチャカとも）、迷惑ナ、面倒カ、物好キナ、軟ラカカ、

優秀ナ、有名カ（有名ナとも）、愉快ナ、豊カナ、乱暴カ、利口カ、ワガママカ

回答の有った135語のうち下線を付した82語（60.7%）、～ナと重複の語形12語を含めると94語（69.6%）がカ語尾形容詞形を取り、従来の見方を裏づけるものの如くである。しかし、～ナ形の形容動詞相当語句も30%強有る訳でその存在を無視することはできない。話者からは、～ナを選択するか～カ語尾形容詞形を選択するかの分かれ目は接続する体言との心理的距離に基づいている（自己の感情を強く吐露する場合はカ語尾形、客観的に一般の事がらとして述べる場合または話し相手に丁寧に述べようとする場合に～ナ形を用いるといった指摘が有った。～ナ形はどちらかと云えば改まった感じのする表現形であるらしい）とのことである。

注目すべきは、大分市方言でイ語尾形容詞形であった30語のうち「インチキー」と「口下手ー」を除いた28語が島原市方言でも全て形容詞形を取ることである。ここには或る程度の共通性が隠れている可能性が有るように思うが如何か。

また、肥筑方言の～ナ形形容動詞相当語は必ずしも新しく共通語等から取り入れたものばかりとは云えないようであり、上述のような使い分けによって比較的早くから存在していた可能性の有ること（形容動詞そのものでなく名詞＋接尾語ないし助詞のかたちで有ったと見る）が考えられそうである。

3．薩隅方言における形容動詞相当語の実態
―国分市方言を例に―

3－1　形容動詞相当語の語形変化

（44）ゲンキジャ・ゲンキジャッ（元気だ）
（45）シズカジャ・シズカジャッ（静かだ）

（46）ゲンキジャロ（元気だろう）
（47）シズカジャロ（静かだろう）

（48）ゲンキジャッタ（元気だった）
（49）シズカジャッタ（静かだった）

（50）ゲンキジャッシ（元気であるし）
（51）シズカジャッシ（静かであるし）

（52）ゲンキジャッタイ（元気だったり）
（53）シズカジャッタイ（静かだったり）

（54）ゲンキジャッドン（元気だけれど）
（55）シズカジャッドン（静かだけれど）

(56) ゲンキジャッデ（元気だから）
(57) シズカジャッデ（静かだから）

(58) ゲンキジャッカ（元気であるか）
(59) シズカジャッカ（静かであるか）

(60) ゲンキジャライ（元気だわい）
(61) シズカジャライ（静かだわい）

(62) ゲンキジャッカモ（元気であるかも）
(63) シズカジャッカモ（静かであるかも）

(64) ゲンキジャッテン（元気であっても）
(65) シズカジャッテン（静かであっても）

(66) ゲンキジャレバ（元気であれば）
(67) シズカジャレバ（静かであれば）

(68) ゲンキジャッド（元気だよ）
(69) シズカジャッド（静かだよ）

(70) ゲンキジャッラシカ・ゲンキジャッラシ（元気であるらしい）
(71) シズカジャッラシカ・シズカジャッラシ（静かであるらしい）

(72) ゲンキジャッヨナ（元気であるような）
(73) シズカジャッヨナ（静かであるような）

(74) ゲンキジャッヨッカ（元気であるよりも）
(75) シズカジャッヨッカ（静かであるよりも）

(76) ゲンキジャッヨッゼ（元気であるくせに）
(77) シズカジャッヨッゼ（静かであるくせに）

(78) ゲンキジャッカ（元気であるか）
(79) シズカジャッカ（静かであるか）

(80) ゲンキジャッテ（元気だのに）
(81) シズカジャッテ（静かだのに）

（82）ゲンキジャッゴチャッ（元気であるようだ）
（83）シズカジャッゴチャッ（静かであるようだ）

（84）ゲンキジャロソナ（元気であるような）
（85）シズカジャロソナ（静かであるような）

（86）ゲンキジャロゴチャッ（元気であるようだ）
（87）シズカジャロゴチャッ（静かであるようだ）

（88）ゲンキジャライ（元気だわい）
（89）シズカジャライ（静かだわい）

（90）ゲンキジャイモス（元気であります）
（91）シズカジャイモス（静かであります）

（92）ゲンキジャッセー（元気であって）
（93）シズカジャッセー（静かであって）

（94）ゲンキジャッガ（元気だよ）
（95）シズカジャッガ（静かだよ）

（96）ゲンキジャロダイ（元気だろう）
（97）シズカジャロダイ（静かだろう）

以上、国分市方言で考えられる限りの形容動詞相当語の語形変化の例を、後藤和彦1994を利用して示した。調査の方法はこれまでと異なり示された語形をそのまま読み上げてもらうやり方を取った。二項目ずつくくりになっているが、これは国分市方言が島原市方言と同様、音節数に関わり無く二種類の音調型を持っている（即ち二型の語声調方言である）ため、それぞれに後接する語尾部分がどのように現われるか明らかにしようとしてそうしたものである。

これらの語形変化の在り方は、次の点を除いて名詞＋助動詞ジャ(ッ)のそれと同様である。即ち、～ジャッドが後接する場合、ゲンキジャッド・シズカジャッドは、「～だ」の断定の意で用いられるのであるが、ゲンキジャッド・シズカジャッドの「～だろう」の推量の意で用いられそうな形は「飴だろう」「花だろう」の表現の際には用いられるのであるが、「元気だろう」「静かだろう」の表現としては用いられず、云わないという返事が聞かれるばかりである（その意はゲンキジャロ・シズカジャロの形が担っているらしい）。その点を除けば、下記の如く、名詞＋助動詞の語形変化の在り方と全同である。
（44′）アメジャ・アメジャッ（飴だ）
（45′）ハナジャ・ハナジャッ（花だ）

（46′）アメジャロ（飴だろう）
（47′）ハナジャロ（花だろう）

このことは、大分市方言や島原市方言の場合と同様、国分市方言の形容動詞相当語を、共通語の形容動詞そのものとは異なり、名詞＋助動詞の一部と見る根拠を与える事実と成る。

3−2　次に連体格の語形を130余例調査した結果を示す（後続する体言は前述二方言の場合と同様）。

生憎な（キノドッカ）、曖昧な（テゲテゲナ）、暖かな（ヌッカ）、当たりまえな（アタイマエン）、阿呆な（ホガナカ）、憐れな（グラシカ）、安心な（ヨカ）、安全な（ヨカ）、いい加減な（テゲナ）、意地悪な（イヂワイカ）、嫌な（*イヤナ）、（嫌味な）、色白な（イロジロカ）、陰険な（*インケンナ）、いんちきな（ウソバッカイ）、（うかつな）、内気な（オトナヒカ）、エッチな（*エッチナ）、円満な（*エンマンナ）、横着な（*オチャッナ）、横道な（*オドムンナ）、横柄な（*オチャッナ）、大げさな（フロシク　ヒロゲ）、大ざっぱな（テゲテゲナ）、おだやかな（ヒトン　ヨカ）、億劫な（ノサン）、同じな（オナヒ or ヒトッコッ）、親孝行な（*オヤコーコーナ）、親不孝な（*オヤフコーナ）、オンボロな（オンボロカ）、勝手な（*カッテナ）、活発な（ゲンキノ　ヨカ）、頑固な（カタカ or *ガンコナ）、簡単な（ヤシ）、気障な（*キザナ）、几帳面な（*キチョーメンナ）、気の毒な（キノドッカ）、奇抜な（*キバッナ）、気まぐれな（オモイツッ　カンガエツッ）、気まじめな（ショヂッナ）、気短かな（キモンミヒカカ）、きゅうくつな（*キュークッナ）、器用な（*キヨナ）、狂暴な（オロモン）、極端な（*キョクタンナ）、気弱な（キノ　ヨワカ）、気楽な（*キラッナ）、きれいな（ミゴッカ or キレカ）、勤勉な（ガンバイガ　キク）、口達者な（*クッガ　タッシャナ）、口下手な（*クッベタナ）、軽薄な（*ケイハッナ）、ケチな（*ケチナ or ケチカ）、下品な（ヒンノネ）、元気な（*ゲンキナ）、堅実な（ジッチョッナ）、強引な（*ゴーインナ）、高級な（タケソナ）、強情な（*ゴージョーナ）、公正な（マッスッカ）、子ぼんのうな（*コボンノーナ）、細かな（コメ or コマンカ）、雑な（*ザッナ）、残酷な（グラヒカ）、幸な（*シアワセナ or フノヨカ）、四角な（*シカッナ or シカッカ）、静かな（トゼンネ）、失礼な（ゴブレイサーナ）、自分勝手な（*カッテナ）、純粋な（マッスッナ）、正直な（*ショヂッナ）、上手な（*ジョッナ）、上品な（ヒンノヨカ）、丈夫な（*ジョッナ）、深刻な（*シンコッナ）、親切な（メンドミノ　ヨカ）、慎重な（ジット　カマエタ）、心配な（*シンパイナ）、神妙な（*シンミョーナ）、辛辣な（トゲノアイヨナ）、スケベな（*スケベナ）、杜撰な（テゲテゲナ）、すなおな（*スナオナ）、素朴な（ショヂッナ）、大胆な（キモ

ガフテ)、確かな（マッゲネ)、達者な（ホネグンノ　フトカ)、単純な（マッスッナ)、重宝な（ヤッニ　タッ or デヒナ)、ていねいな（*テネナ)、(手軽な)、得意な（*トクイナ or ウメ or ジョッナ)、鈍感な（ニビ)、生意気な（*ナマイッナ)、にぎやかな(ニッギャケ)、熱心な（*ネッシンナ or キバイ)、のん気な（*ノンキナ)、ハイカラな(*ハイカラナ)、バカな（*バカナ)、卑怯な（ヒキョーモン)、皮肉な（*ヒニッナ)、貧相な（トボレン or ビンブタラヒカ)、無愛想な（アイソンネ)、不安な（シンパイゴッ)、不器用な（*ブキッチョナ)、無作法な（*ブサホナ)、不思議な（*フシッナ)、不自由な（ジユノ　キカン)、物騒な（オソロシカ)、平気な（シレーットシタ)、下手な(*ヘタナ)、変な（チゴタ)、真っ赤な（マッケ)、真っ暗な（*マックゥーナ)、真っ黒な（マックレ)、真っ青な（マッサオシタ)、真っ白な（マッシレ or マッシロカ)、真っ直な（*マッスグナ)、真っとうな（ショヂッナ)、間抜けな（マノヌケタ)、妙な（*ミョーナ)、無邪気な（*ムジャッナ)、無神経な（*ムシンケイナ)、無ちゃくちゃな（ヤイタイホーダイ)、迷惑な（*メイワッナ)、面倒な（メンデ)、物好きな（*モノズッナ)、軟らかな（ヤワラケ)、優秀な（*ユーシューナ)、有名な（ナノ　シレタ)、愉快な(オモヒトカ)、豊かな（ヨカ)、乱暴な（ボッケモン)、利口な（*リコーナ)、わがままな（ガノ　ツヨカ)

云い代え語形が多く、上述二方言のように形容詞形を簡単に割り出し算出することは容易ではないが、回答の得られた132語のうち、波線を付した15語（11.4%）はそう認めて良いものと思われる。一方、＊を付した～ナ形58語（44.0%）は、共通語の形容動詞と形の上ではほぼ同様の在り方を取っているとも云えるが、大分市方言と同じく＋接尾辞用法と見なすこともちろん可能である。

ときに、ここでも注目すべきことは、大分市方言で形容詞形を取っていた30語のうち「暖かな」「意地悪な」「色白な」「おだやかな」「気の毒な」「気短かな」「気弱な」「△ケチな」「細かな」「△四角な」「にぎやかな」「物騒な」「真っ赤な」「真っ黒な」「真っ青な」「真っ白な」「面倒な」「軟らかな」相当語18語が何らかの形で、やはり形容詞形を取ることである。島原市方言における様相と考え合わせ、それらは或る意味、九州方言において共通性を有する形容詞性の強い語と認めて良いのではないかと思われる。

4．まとめ

4－1　以上の検討から、次のようなことが云えそうである。

1）豊日方言においては、形容動詞相当語の語形変化の在り方は、名詞＋助動詞のそれと同様であり、必ずしも〈形容動詞〉を文法的に立てるべき積極的理由は認められない。連体格の形においては、共通語と同様の～ナ形も多く見受けられるが、一方形容詞形を取るものも少なからず存し、全体としてそれらを名詞＋接尾辞形と見なすのが適当であるように思われる。～デ形・～ニ形については検討の限りでないが、やはり名詞＋接尾

辞 or 助詞と見なすのが適当ではないかと推測される。

2）肥筑方言においても、形容動詞相当語の語形変化の在り方は、名詞＋助動詞のそれと同様であり、必ずしも〈形容動詞〉を文法的に立てるべき積極的理由は認められない。連体格の形においては、カ語尾形容詞形を取るものが多く、この点従来の指摘は或る程度正しい。しかし、少数ながら～ナ形を取るものも存し、カ語尾形容詞形とそれらとは話者らによって或る一定の基準により使い分けられている（詳しくは、2－2参照）。その辺りから見て、～ナ形は、必ずしも共通語の侵入等により生じた新たなものとばかりは云えないようである。全体としては、～ナ形・～デ形・～ニ形について名詞＋接尾辞 or 助詞と見なすのが、検討の範囲からも適当ではないかと考えられる。

3）薩隅方言においては、形容動詞相当語の語形変化の在り方は、名詞＋助動詞のそれとほぼ同様であり、やはり、必ずしも〈形容動詞〉を文法的に立てるべき積極的理由は認められない。連体格の形においては、共通語との対訳の枠に収まりきれない実にさまざまの表現形が現われるが、形容詞形を取るものが若干有り、それらは、豊日方言・肥筑方言と共通するもののように見得るフシが有る。～ナ形（＊を付したもの）も少なくないが、全体としてそれらを名詞＋接尾辞形と見なすのが適当と考えられるのは、豊日方言の場合と同様である。～デ形・～ニ形についても名詞＋接尾辞 or 助詞と見なし得るかと推測される。

4－2　1）～3）を通じて次のように云えるであろう。

九州方言には、〈形容動詞〉に関し、豊日・肥筑・薩隅の三区分に共通して、これを名詞＋助動詞の文法的枠組みで把えて然るべき語形変化の在り方が認められる。連体格の形などに関しても、むしろ形容詞的在り方が色濃い肥筑方言のみならず、豊日・薩隅両方言でも共通する形容詞的在り方が認められ、共通語と同様の～ナ形を取る場合であれ、名詞＋接尾辞の意識で表現しているものと把えるのが正鵠を得ているように思われる。～デ形・～ニ形に関しても推測の範囲ではあるが、名詞＋接尾辞 or 助詞の形で把えるのが適当と判断される。

一言で云えば、九州方言は〈形容動詞〉の未発達な方言である、と云うことになる。

【注】

1　鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座4　形容詞・形容動詞』1973等に要領良くまとめられている。

2　九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』元版1969、p.232 などに熊本方言の同様の例について記述が有る。

【引用文献】

後藤和彦　1994『鹿児島方言の語法研究』

松田正義　1961『方言学講座4』「四　学校における方言と共通語教育　1九州北部―大分中心に―」